

本論文は、南泉州（和泉国南部）の豪農要源太夫家を事例に、都市近郊農村特有の条件・問題、中規模藩である岸和田藩の特性に目配りしつつ、豪農の地主（経済）的側面と政治的側面を検討し、それぞれの側面で豪農に求められた力量を明らかにしたものである。

本論文では、豪農の経済的側面・政治的側面を検討していくにあたって、近世畿内地主経営論と政治的中間層論の観点から、本論文の問題意識と課題を提示した。これまでの近世畿内地主経営論は、経済的条件から地主経営の展開を説明し、価格変動を的確に察知する地主の商人としての力量を明らかにしてきた。これに対し本論文では、小作人を安定的に確保する豪農（地主）の地主としての力量を解明する立場をとった。一方、従来の政治的中間層論は、中間層（豪農や村役人）の政治的役割を高く評価し、地域運営能力・政策立案能力といった、中間層の「政治的力量」を明らかにしてきた。これに対し本論文では、領主支配の問題を組み込む必要があるという近年の課題を前提に、岸和田藩の特性に着目しつつ、豪農の政治的役割がいかなる力量によって果たされていたのかを再検討する立場をとった。これらは、地域の条件とそこから生じる諸問題、藩の地方支配の特性に応じて豪農に求められた力量とは一体何であったのか、さらにいえば近世社会だからこそ一層求められた力量とは何であったのかを問い直す試みである。

第1部では、豪農要家の経済（地主）的側面を地域的特質に目配りしつつ検討し、地主としての力量を検出した。第1章では、近世畿内地主制史研究の成果と課題を整理した。第2章では、都市近郊に位置する南泉州平野部村落で生じていた問題と、これに対処する地主の経営戦略を明らかにした。第3章では、当該地域の主要産業である和泉櫛産業の動向から、直接生産者の動向と地域的特質を把握した。第4章では、小作希望者の減少・町方への労働力流出といった問題に対して、地主がどのように小作人を確保・編成し、経営を維持・展開していたかを解明した。補論では、小作料減免を地主の経営戦略と捉え、小作料減免を巧みに駆使して小作人を確保する地主の力量を検出した。

第2部では、豪農要家の政治的側面である七人庄屋の役割・力量を検討したほか、要家の家格上昇問題から七人庄屋層内部の問題、岸和田藩の特性を浮き彫りにした。第5章では、岸和田藩の地方支配の基礎構造を把握し、七人庄屋の役割と、その力量が発揮される場面や過程を明らかにした。第6章では、岸和田藩の資金調達的一端を豪農が支えていたことを解明し、「条件のよい藩」に比べ信用力が乏しい岸和田藩だからこそ、豪農に求められた資金調達能力を検出した。第7章では、献金による急激な家格・序列変動、献金称誉制度の弊害を明らかにし、献金による家格上昇者に対する嫉妬・反発、なかでも領主支

配の一端を担う集団の構成員同士の不和が実務の非効率化・遅滞化を招き、地方支配に支障をきたす要因になりえたことを指摘した。そしてこれは、世襲の七人庄屋が一つの会所に集まって地方支配の中核を長年担うという、岸和田藩の特性があったからこそ著しく表出した問題であったことを強調した。

これらをふまえて終章では、地域的特質に基づく豪農の地主としての力量、藩の特性に規定された豪農の「政治的力量」の中身を整理した。その結果、①地域特有の問題に対処し、小作人を安定的に確保する地主としての力量と、②「表向き」の活動・場を補完し、状況に応じて「内向き」の活動・場を設け、藩・領民の要求に応える政治的中間層としての力量があつてこそ、要家は地主経営を維持・展開し、政治的中間層としての役割も果たしえたことを明らかにした。そして、これらの力量は、近代に比べ普通地主小作関係が不安定で（①）、地方支配の実現には「内」の世界が一定程度必要であったことから（②）、近世社会だからこそ一層求められた力量であったと結論づけた。さらに、要家の資金調達能力についても、無担保で、事実上「地頭借」の郷借は銀主にリスクがあつたために、銀主に藩への出資を承諾させる力量が一層求められたことも指摘した。これも、近世社会特有の問題であったとした。

また、終章の課題と展望では、要家の経済的・政治的側面の統一的把握を試みた。そのうえで、地域的特質の把握と豪農の経営分析があつてこそ、政策立案といった豪農の政治的行動が説明できることを強調した。